

ナ
マ
イ
キ
天
使
は

ホ
メ
る
と
伸
び
る



FeatherNovels

Miyafool



綺麗なハイキックで俺を沈めてから、彼女は尻尾をフリフリ台所に向かった。着替える様子は無い。本人も嫌いではない。カチャカチャと朝食の支度の音がする。カで料理が上手い。しかし俺はハイキックをよ褒美にもらいたいがタメに着せさせたのではない。日曜の朝をエロキックに始めるタメだ。足を忍ばせて後を追う。キッチン前でフンフン鼻歌。

むき出しの白い背中、オシリ。はだかエプロンは素晴らしい。「キ」

下半身にタックルをかける。ひそかに手を入れて押す。カクンと折れた。腰砕けになった上体を抱えて前のめりに置く。「おぶないですよ。刃物持っていたらどうするんですかよ。持っているのは確認済みだ。安全第一エロスもタイ首位だ。

回つた這い這い寝る彼女の「ブ」に吸いつく。尻尾が揺れる。「」



「へっ、もう、朝っほアツカ」

シタバタしてた小柄な肢体も、舌の動きが滑らかなように
従いおとなしくなる。天使ちゃんは濡れやすい。

舌先で秘所をまよへりながら指で内股を撫でる。彼女は
「しも好きだ。洩れる唾を糧命にアツカアツカ。可愛い。

「あな、天使ちゃん」

愛撫の合間に声を掛ける。汗をこじました顔が振り向く。

「この尻尾、テーブで留めてあるんだけどホントはオシりに
差し込ませようなんだ。そうしていいかな？」

「いますぐ死んでください、アツカ」

スゴイ目で睨まれた。今回は見送ろう。しかしいざれば。
日々、彼女は可愛くなっている。俺の手で。幸せな日々。
そうなるはずだった「彼女」も、今、幸せになっているだろうか。



とほほ。

現在の俺の心境はしてやる。さうさへ地球上で一番、いい間抜けな擬態語が似合っているハズだ。賭けてもいい。

まのう、俺は婚約者に逃げられた。こっちはまだいい。いや、良くはないが。有りえる話だ。ドラマとかで。

しかし結婚式当日に逃げるハ下はなからう。ええ、花嫁よ。

純白のタキシード姿で、置手紙をホカインと眺める間抜けな俺。その前で土下座する新婦の二両親。

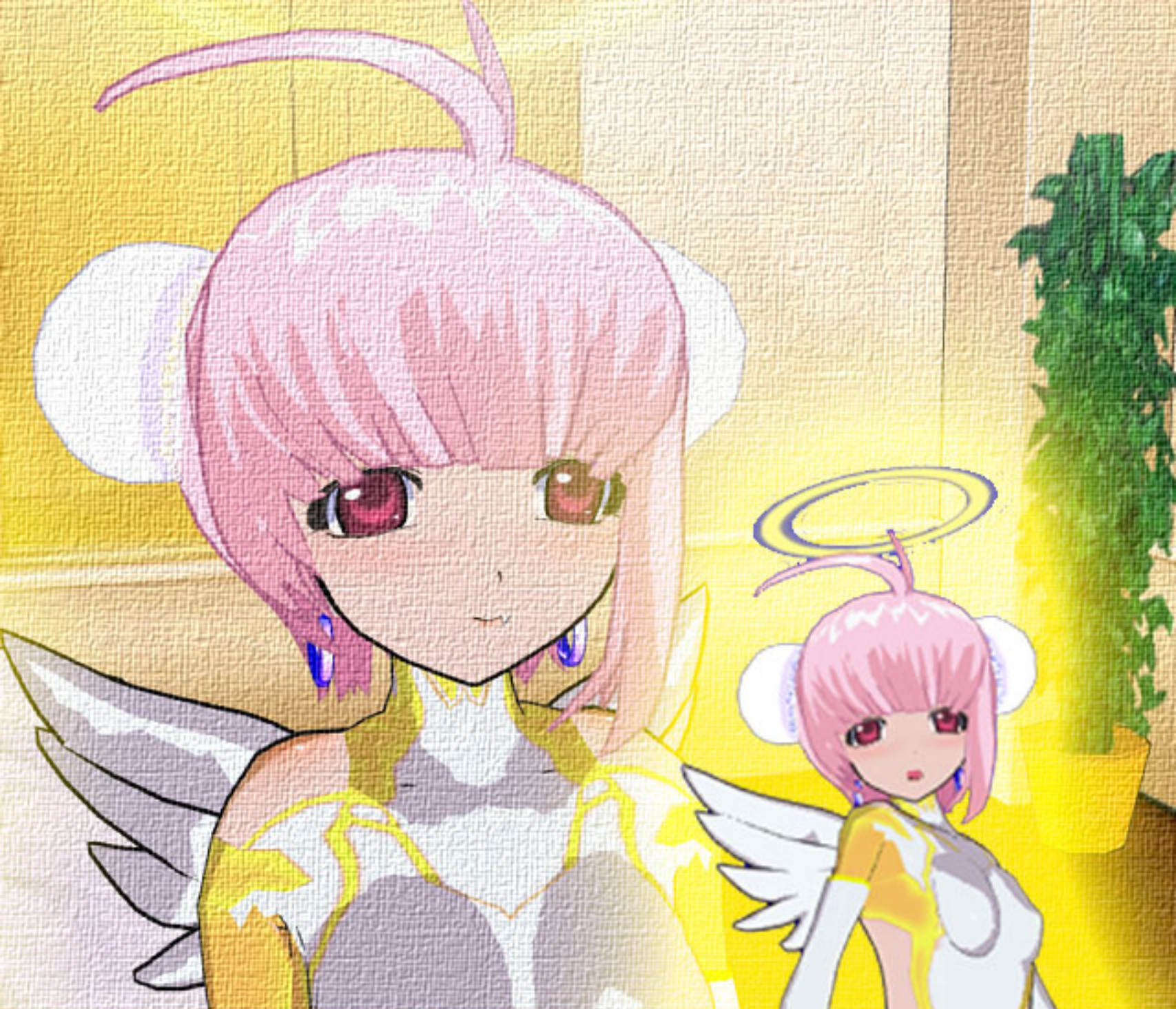
思い出すだけで悶絶物の痛いシーンだ。足をバタバタさせずいられるか。

とっせん式は中止。白タキシードで頭を下げまくる俺は、招待客の皆様方は優しく慰めの言葉をかけてくれた。

それを生暖かく感じてしまっなのは、俺がイジけてるせいかな。とっせ、いまハワイである。まっさん一人で。

なにやっつんの、俺。





あれ？間違えたか。えーと。
カッ！

受話器に訊き返した返答は、凄まじい閃光の
爆発だった。たまたま目を閉じて顔をよむてる。

「現地作業天使0056999です。天使ちゃんとお呼び下さい。お客さま」

千力千力するまぶたの向こうで、野のよつな音が
響いた。おゆるおゆる目を開ける。

なんか、いた。

「お客さま〜」

「キリン、「メロ」のメロ？」



「失敬な。」「だから日本のJKTは」

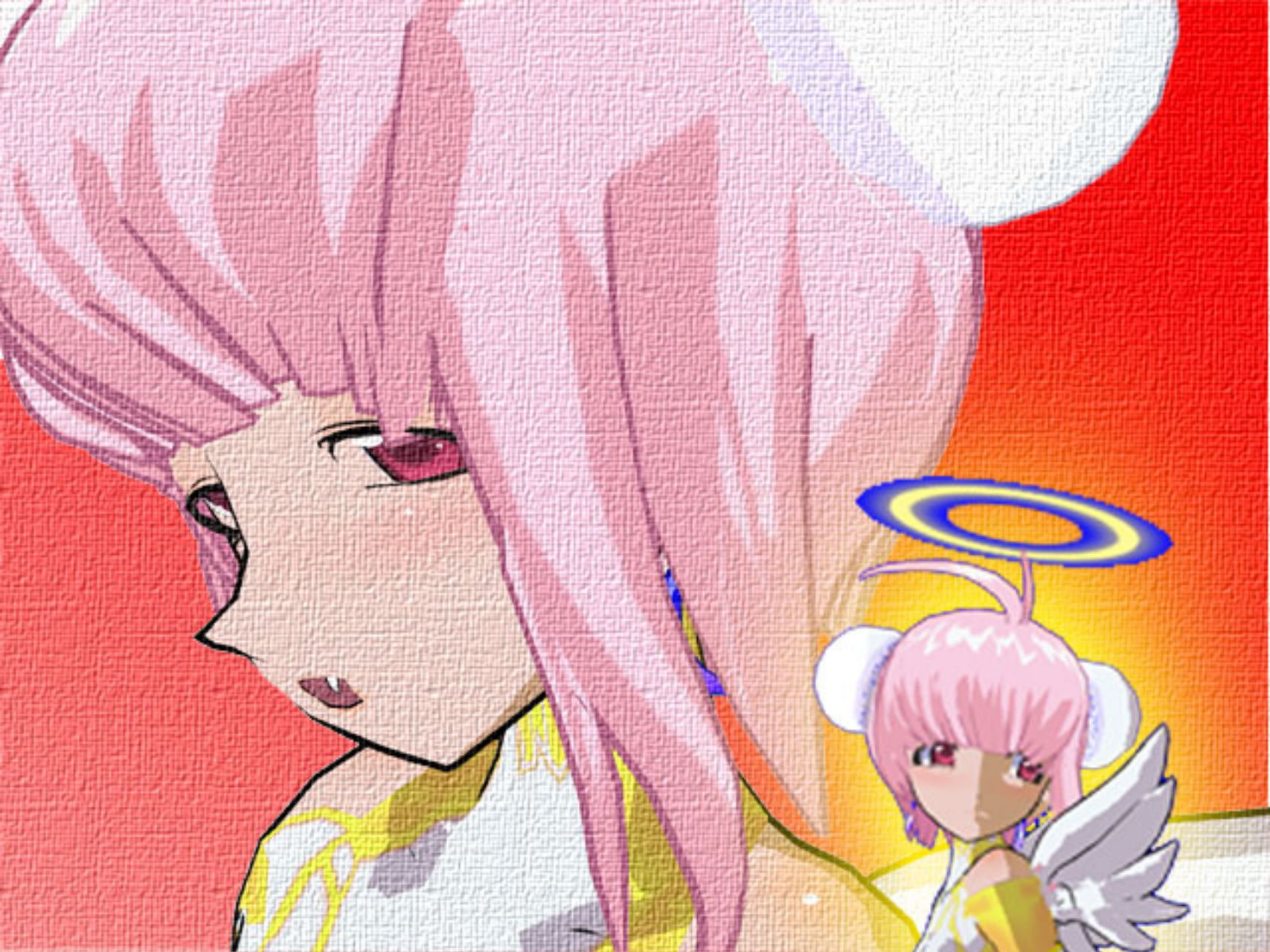
「おや？　なんか目線が変わったぞ。温度がぐッと下がった。」

「わたしは本物の天使です。」「ス、ス、ス、でも魔法少女でもありません。フリーでもキョウマでもありません。オタク嫌いです」

そのわりには詳しくあった。

「わたし達は、マナタのような哀れなユリジメな人間を救済するために、日々身を粉にして働いているのです。本来なら今すぐお返すところ先の暴言の許さなところのが当然じゃない？」

第一世のソニアバニーは、お返しを、完全に上から目線でのたまわれる自称天使サマ。ホントにオタクが嫌いじゃない。別に俺はオタクというほど専門的ではないが、膝をついて許さなところほど信じ込んでもない。第一、天使で、あんた。



しかし、良かれミジメな人間、とまたたか。

たしかに今の俺もよくよく思はれるにしろたしかにうう。

「なあ、天使ちゃん」

「なれなれしてどうかな」

「あつとメムへも。あのミジメで良れな俺を、天使サマは

どうやって救済して入れたねんだらう？」

「願いを叶えます。ひょつたは」

「えーと、魂とかどうされるの？」

「悪魔いちゃあるまうして、無償だよ。ただこ後の記憶は消す

せいでいただきます。あんまり強欲なのもダメです」

なるほど、設定が細かいな。最近の「メム」。っ子は頭が

イイ。ちびきの閃光も妻が細かった。チビが洋モノ。

あつ、乗ってどううう。たたく、ちびとメムも、天使っ子。

「わかった。いっせ、あつ——俺と結婚してたい。天使サマ」



「騒がしいですよ、天使ちゃん」

ポポン、と煙が立ったと思ったら、もう一人増えていた。

褐色肌の巨乳お姉さんだ。コスプレ仲間を見た。登場の
ノウハウは今は無視だ。たぶんのGだまっ。

「ガブリエルさま、助けてください！この不埒者が卑猥な
願いを強要するのです！」

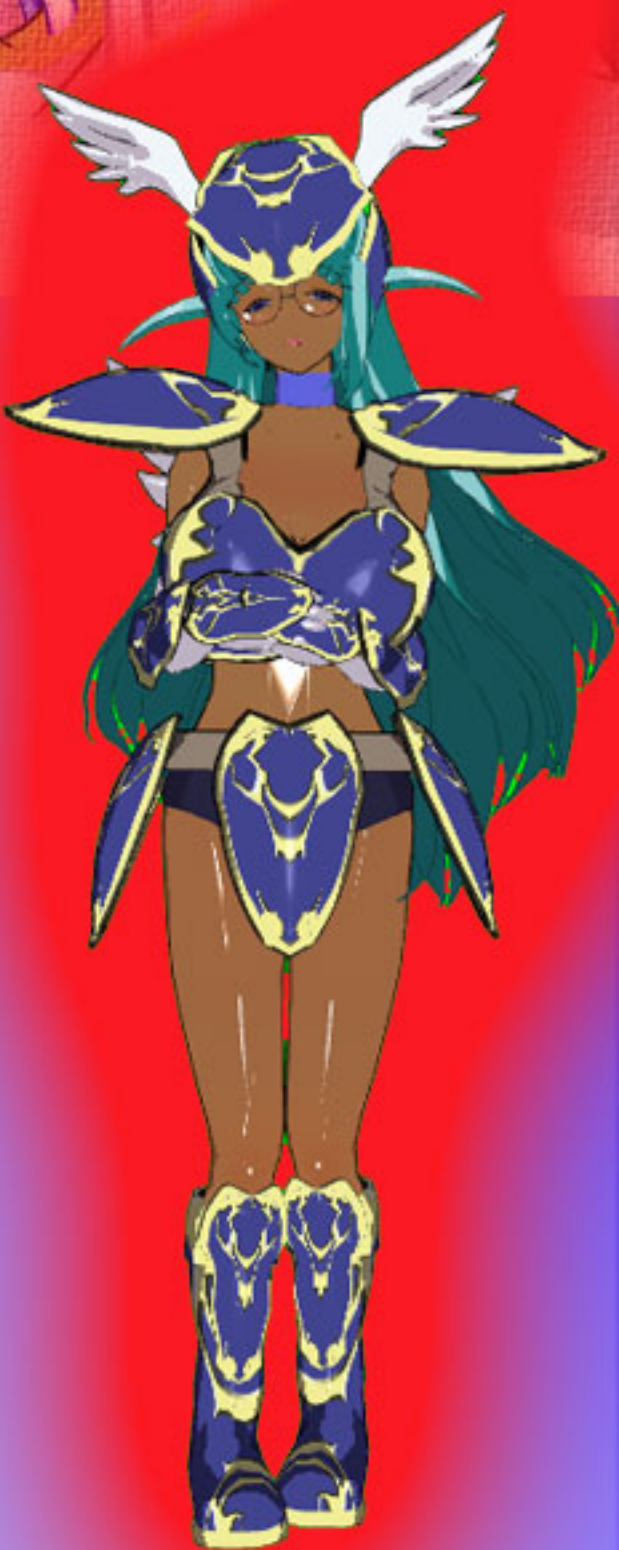
「えっ、オレ!?!」

「そつなのです！せんぷレイツが悪いのです！セツ、いま
すぐキャンセル&テストロイなのです！」

なんで俺がテストロラれねばならんのだ。「スプレ劇場は
フシーヤーだけでやってほしい。アドリフは苦手なんだ。

「嘘は重罪ですよ。天使ちゃん」





「いえ、あのスキルマセバ。唾いぢをなへい。その、お茶目っ」

「巨乳姉さんの後光の色が変わっている。ゴクゴクとそれをうかがいつつ、視線を反らす天使っ子。

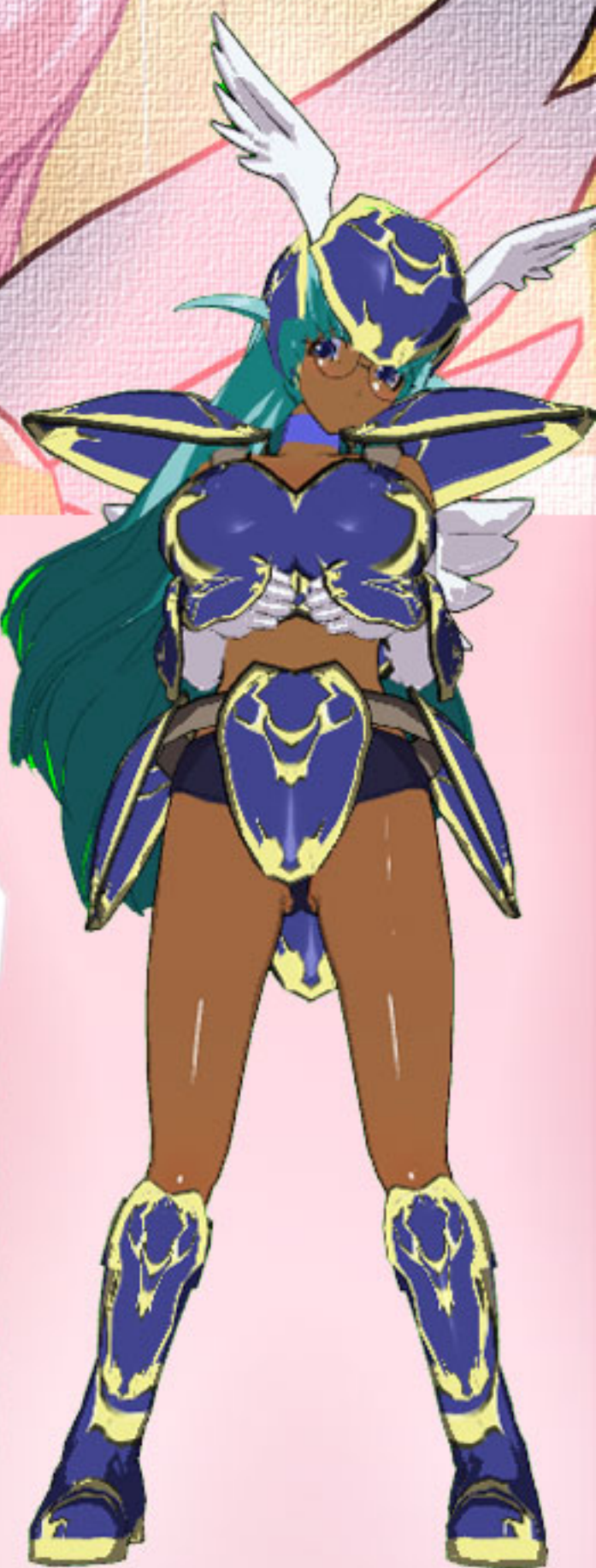
「こいつ、ちょっとタチ悪いなあ。あ、と設定か。そんなキャラの。うーむ。うん、もういいだよ。」

「俺がお願いしたのも冗談なんで、そろそろお引き取りをたぶん、ホテルのサービスかなんかだろう。面白かったよ。」

「はい。契約はもう完了しています。あとは彼女が姉さんはどう微笑みかけて天使っ子の肩を叩いた。

「へ？ ガブリエルさま？」

「受理の印を受けたアナタはもう彼のモノですよ。カラダも彼用に変わっていますから。頑張りなさい」



「嬉しいお話ですがお断りしますわ。カマタの方からい
天使ちゃんのせいなんでしょう。婚姻はほ、どういっせいの
どうでしょう」

「ノゾミさんへさしなをさあも」

「ダメ。やっぱり断りなさい。手はっちははまよから」

巨乳姉さんが右手を軽く振った。それだけで、俺は身動き
がとれなくなった。なんだ、どうなってるんだ!!

「ガ、ガブリェルさま?」

「ロロロと笑み返ってきた天使の子が、俺の胸のズレて
手をかけた。外してネーす。不着せいで」
「ガ」。「あ、い、う」。

「カラダが、勝手に動くんですけど」

泣き声のまま、パクリと唾を吐いた。



俺が我慢しきれなかった大量の精液を、彼女は全てその
小さな口で受け止めた。そして俺の顔をじっくり見上げて、
なんの迷いもなく「クゥ」と飲み下した。

「……おっしー。じゅ、な〜んじゅーですー！ 生身くっ、キキ〜んじゅ、
最悪ですー！ マナタ、なんでも〜を飲ませるんですかー！」
わっわわあ〜の淫靡な笑みは、おっしゅ〜、情欲の形相で暴き
立てる天使っ子。とりあえず、口をふさぐ。

「おっしゅ〜、いまなら〜エロっつてなに考えてるんだ。ホテルの
サーブスに〜じゅもさ〜り過かたろうが」

「マナタが変な願ひ事するから悪いんですよー！」
「ご黙に決まっしるたろ。誰か奢みたいなチンチクリンや」
「じゅ、じゅ〜を〜」

奉仕のポーズで膝立ちのまま、いきり立つ天使っ子。

「はい、はい、痴話テンカは〜じゅまで。次、いきますよー」



「次はショーツ脱いで、おねだりのポーズ」

「おいッ、ちめっついで」

天使っ子は泣きやくな目をぐっつちを見上げている。お前も
なんぞ言っ「トキ」してるんだ。「うう、パンツを脱ぐな。

「ううなったらかつかくしかない」と巨乳姉さんに伸ばした手が
また硬直した。なんのトリックなんだ。

「いちいち抵抗していいは前に進みませんよ。願いを叶えな

ければ、天使ちゃんはずっつとこのままです。抱っこしなけん
くだねいな」

「つかい、嫌がってなんでいっかが」

「最初だけですよ。あなた方の相性はフタムとエイブ並みに
調整してあります。ほ、うう、天使ちゃんもめんならなっついでっ♡」

見れば、天使っ子はめろめろな姿で腰をガンガン揺らかせ
ている。なんだよ、その美しいうつメは。誰かやめてっついでっ。



「ほかぁーッ、ハンタイッ！ 見るなぁーッ！」

自分でめっぴんげながら、喚きたてる天使っ子。

「いや、キレイだよっ！」

「評価すんなッ、バカぁーッ！」

泣き声になってきた。むしろ裸れみを誘われるな。

「いそいそ、見られて興奮してるのかもかもしれませんよ。ほら、

天使ちゃんたら自分一人で始めちゃって♡」

「ひっ、や、ママ」

姉さんの言葉に従ううちに、秘所を広げていた細い指が
好しく痒み始めた。始めは肌を撫でるようになって、次第に興へと
進めてくチュクチュクと掻き回す。

「いやッ、ちあッ、あはあッ。ガブリエルさま、許してっしょー！」

「♡」
「♡」



「ナ、ナニをなしているのさつもらいめじやりますが」
ほっくり大股開きにさせられて、天使ちゃんはパンクしている。

「だぶん……、挿れるっ」

「きゃーっ、犯されるぅーっ!!」

叫びながらシタバタ暴れる。しかし完全にぞーゆー体勢だ。

これをひっくり返すのはカレリンでも無理だ。

俺もアタマではブリーキを踏みまくっている。しかしカラダは

むしろ反抗して組み敷く力を増す。

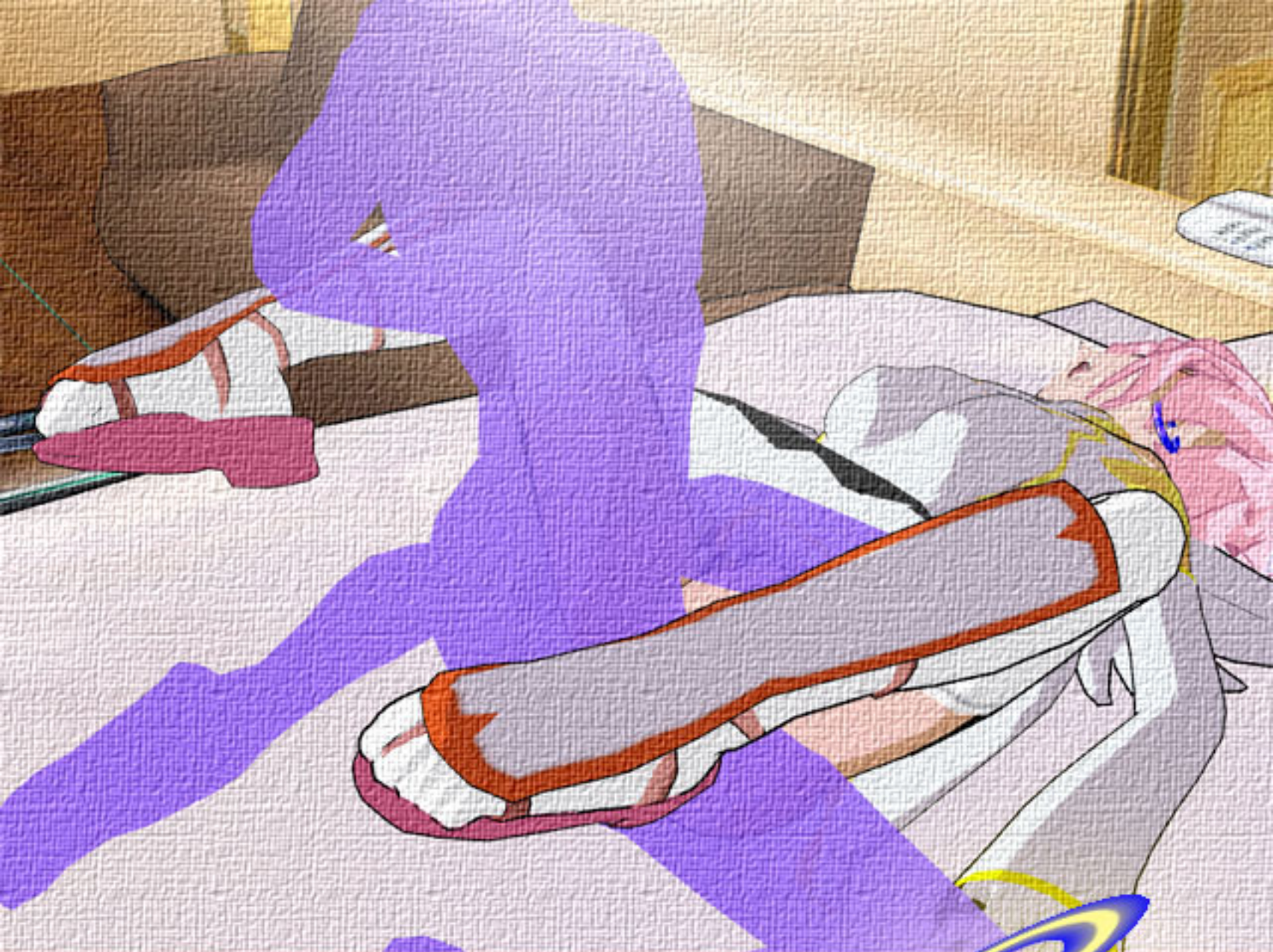
そんな俺たちにガブリエル様が声をかけた。

「ためため。契約の強制力に反抗すると、逆に乱暴に働か

ますよ。愛情を思いやりが、ダイ・ジ」♡

「そんなぞく最初から非実在の架空の未確認動物ですよーっ!!」

天使ちゃん、なかなか弁が立つ。



意に反して俺のカラダはデキパキと動く。脱ぎかけた服を脱いで、こじ開けた両脚の間に腰をグイと進める。

接触した。ひい、と息を呑む天使ちゃん。

まずい、これじゃ完璧にシイフだ。俺は好きじゃないんだ。

ストップが無理なら、せめて優しくシツデやりたい。

力を抜け、天使ちゃん。諦めて俺に任せろ」

「無理ですよ。とっついてアナタなんかは」

「キャンセルは無理なんだろう。できるだけ優しくするから」

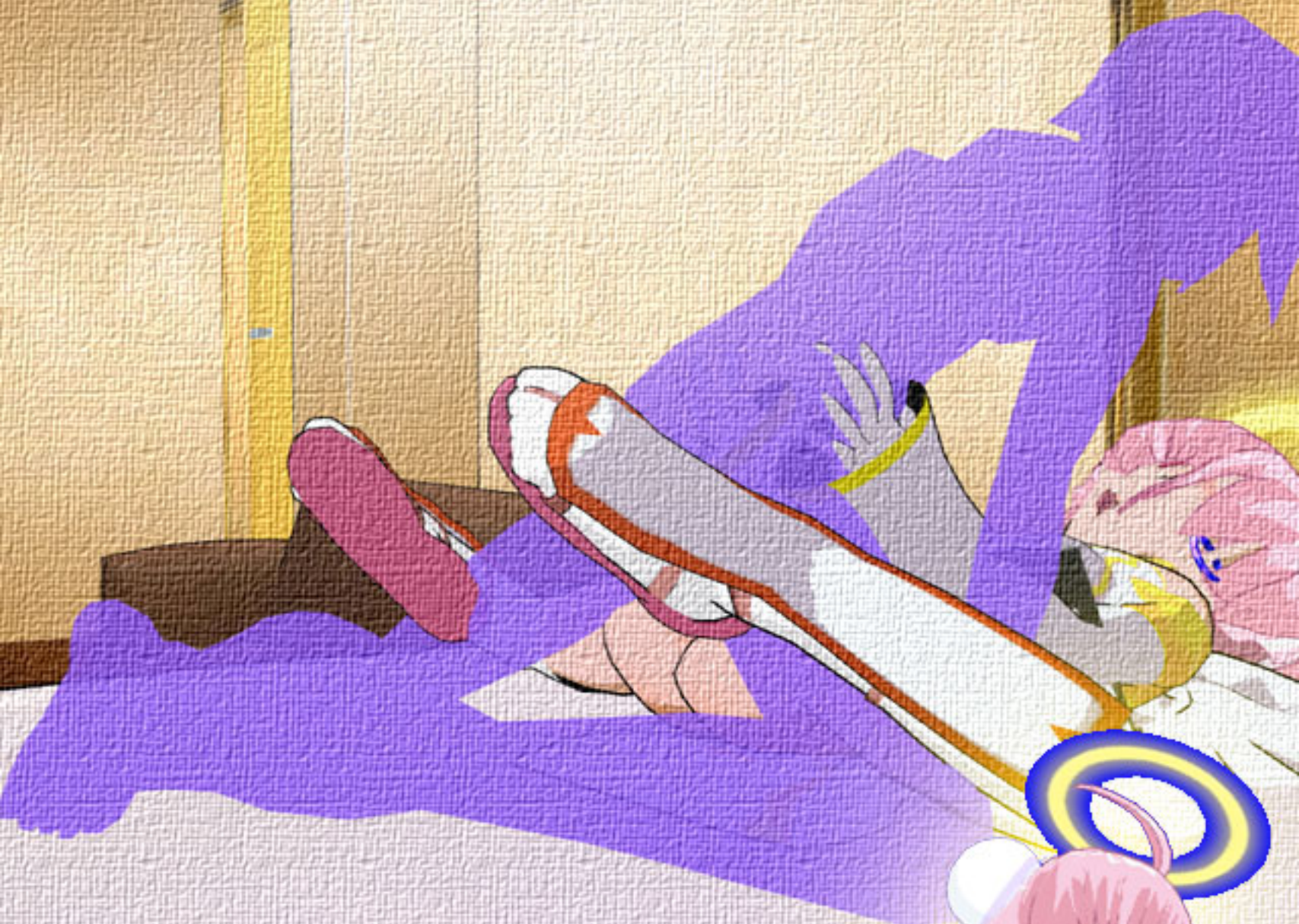
「……」

「信じてくれ。俺も、君を傷つけたくはない」

「……………」

くたり、と天使ちゃんのがみが消えた。深く息をつく。

その吐息の音が静かになり、俺は腰をぬいじった。



ひび。
嵌まった瞬間、天使ちゃんはそんな息を吐いた。

俺は止めずに奥まで進めた。彼女の中は予想以上に狭くて熱かった。圧力と摩擦でじつじつにもギリギリと痛みが襲ってくる。しかし処女喪失よりはムツなはずだ。

「あ、が、う、ぞ、じ、き、い、ち、ま、け、い、び、ず、る、い、じ、つ、た、の、お、い、ご、こ」
息も絶え絶えの癖に、文句は忘れない。根性はある。

「我慢して。最初だけは仕方ないんだ」

彼女の中をじわじわ進んでいた男性が、何かに引っかかる。アした。俺などが貫ってはいけないうし。だが、止まらない。
「いだあーっ!?!」

叫んだ天使ちゃんは、俺のわき腹を凄じい力でひっかいた。

「よく頑張った。ハイライぞ、ハイライ」

あぢすあつじつ頭を撫でしするむ、く、く、ん、と子宮みたいじつ鼻を鳴らした。あれ? 可愛い。





甘い。柔らかい。暖かい。

天使ちゃんとのキスは、とても優しい味がした。

唇だけで我慢できず、すべて俺は舌を入れてしまった。

「あ……………はぁ……」

ゴクンと嚥えた彼女も、じきに諦めたのか歯を開いた。

フワフワの砂糖菓子のきつな味と、甘口の美酒のきつな

唾液。俺は夢中になった。

。キキキ。キキキ。キキキ。キキキ。キキキ。キキキ。

水気たっぷりな音と、じきに苦しげな吐息が絶え間なく続く。

俺は彼女の口を夢中で犯した。呼吸も止れて舌を絡める。

息苦しい口を離すと、俺と彼女の舌に透明な橋がかかった。

それが切れて溶ける時、おどろきながら口をたたく。

止まらない。

本気で食べてしまいたいという欲望が湧いてくる。

そんな俺のカラダの下で、彼女はただ従順に舌を許している。



「ダメです……。まっ、んごう……」

そう囁かれて、俺ははっと我に帰った。

顔を離すと、天使ちゃんが深く息をついた。紅潮した頬が

艶めかしい。薄桃色の唇はメラリと光っている。唇の端から

よだれの筋が垂れる。ぜんぶ二人分の唾液だ。

「……とんだけキスが好きなんですか。わたしを窒息させる

気ですか？」

時計を見れば30分近く経っている。気づかなかった。時間を

本気で忘れていた。

「いめん。気持ち良かったです」

結ばれたままの下半身も意識から消えていた。抜っつと

するや天使ちゃんが苦しそうに身をひねった。

「ひゃ。う、動いちゃダメえ。くっついてなごっつてはですかかり

んごうっつと羅をそんごっつかねの。





「すまない。痛かったよね」

繋がったままカラダを抱く。ひめめと彼女が喘いだ。はて、痛みではないのか。しかしそんなスグに治るものなのか。女子ではない俺にはわからん。

「言っただいじょう。ノナタオの相手はフタコとインプ並みだよ。」

破瓜の痛みなんて「腰のロコロコ。ふふ、天使ちゃん」
ガフリーエル様が椅子に懸掛けたまま説明してくれた。

「キスだけで達してしまいたいってなるなんて、エッチな子」♡

「ちがいますッ、ガフリーエル様の……」

それは俺も同意だ。このオオ天使様はアスに勝つな。

「せんぶ契約の強制力のせいです。サントー……」

「気持よかったクセして♡」



「強制力のせいでお気持ち良かったんですよー！」

強く主張する天使ちゃんだが、下半身の方は依然、俺と

絶賛合体中である。身ごもるたび洩らす確率が

ぐいせぬっほい。わい、これをぐいせぬか。

天使ちゃんの処女を奪った瞬間から、あの身体を奪われる

ような感覚は消えている。卒業したこの少女の上の種を

振りまくれるほど、俺は眠っていないつもりだ。

しかく痛みもさっ無く、むじろお持ちさめかったのなら話は

違ってへる。俺も男である。しかさっの天使は大変可愛い。

横たわる彼女の小さな尻尻みき、俺はぐいせぬた。

「ふん……。なんですか、痴漢ですか」

「…天使ちゃん、勢きがしたい。正直、俺は骨が抱きたくて

たまらん。最後まで、骨を抱かせてほしい」



ガバッ。カラダが先に動いた。天使ちゃんを完全に組み敷いて、下半身の結合もスフリと深まる。

はあんッ。彼女が可愛い悲鳴をあげた。

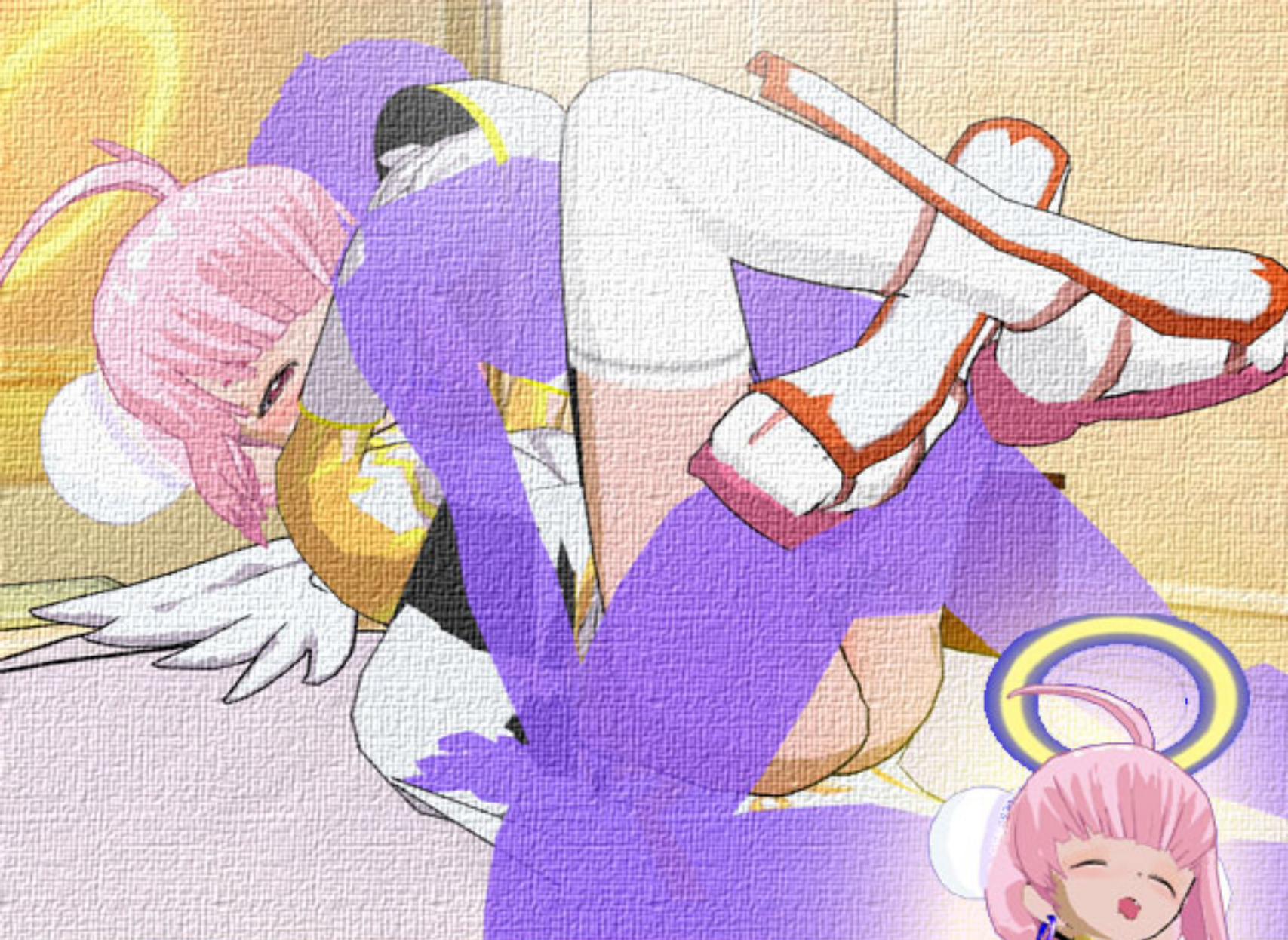
「イヤッホーッ。嬉しい。最高だ。可愛がってやるせ天使ちゃん。だげと、ぶっしてだ？ あんなにイヤがってたじゃないか」

「ハッ」に豹変した俺を、天使ちゃんはまた下から覗んだ。

「度し難い大バカですよ、アナタは。さっきから、スッポリ嵌めたまま動きもせず、半時間もまっただけで焦らして、そのあげく同意だなんだと建前ばかり。なんの放置プレイですか」
「は。カラダを解きもせず、深々と刺したままです、っ。っ。っはへんになりやうたさ何度か聞いてあげようかー」

胸を揉みにいった腕を、掴んで思いきり噛みつきやがった。
「イデーッ。だげと嬉しいッ。」

つまり、辛抱たまらんや言っつた。天使ちゃんも。



「天使ちゃんの紅潮した顔が真下にある。可愛いなあ。」

「なんか不思議な成り行きだけとさ。けっけっ好きだよ。」

天使ちゃん

「はいはい。お生憎様、わたしは大っ嫌いですよ」

「そう言うなっつて」

俺は腰を送り込んだ。彼女はのけ反る。白い喉が綺麗だ。

「がんばって、気持ち良くするから」

ギシッ、ギシッ。スプリングが悲鳴を上げる。腰だけじゃなく、身体全体を使って彼女の華奢な肢体を掘り返す。

緩急つけて、前後に、左右に、回すように、時には止めて様子を見る。何度も何度も、激しく、優しく、執拗に。

あぁッ！

一番深く繋がったとき、彼女は叫んで俺の首を抱き締めた。頬が密着する。俺の腰に細い脚が絡んだ。凄い力で締める。

「じゅ、痛かった?」

密着した俺の顔に、頬ずりするまぶたに天使ちゃんは首を振った。良かったみたいだ。初めてでいきなり奥が感じるとは、将来有望である。天使ちゃん、恐ろしい子……。

奥に当たったまま、ゆっへり擦ってみる。
ひゅ、ひゅ、ひゅ。

歯を喰いしぼって顔をのけろろは、うは。

我慢する天使ちゃんほっとも艶っぽい。眉をしかめ、眉間にしわを刻んで歯を喰いしぼっている。顔を振るたびに飛び散る汗の珠。洩れ出る嗚咽。可愛すぎる。

俺のカラダに回した手と太ももが、力の限り締めつけようとする。こんな頑張り甲斐のある女の子は初めてだ。俺の性運動のじゃれじゃれが、一分のロスも無くて彼女の中で快樂に変換されていくまぶたな感じがする。これが相性なのだろうか。



天使ちゃんはべったりダウンしている。俺も1K0寸前だ。はりきり過ぎた。あまりに気持ちいいもんだから、ペース配分を忘れていた。少し休まないでヤバイ。

全身に汗の珠をむすび、はあはあと荒い息をつく天使ちゃん。この子の最初の男になれた120が素直に嬉しかった。

快樂の余韻に浸る様子も艶めかしい。彼女が薄目を開けた。視線が合う。

天使ちゃんは俺の顔をじっと見て、っ、っ、と唇をきらきらと、また目を閉じた。極微だが顎が上を向いている。

素直じゃないな。キスのおねだりはもっと判りやすくならない。俺は唇を被せた。ほんの少し待って、彼女の口が開いた。舌を絡め合う。フワフワの舌。甘い唾液。かすかに荒い吐息。

俺たちは長く、しかし優しく唇を合わせた。穏やかなキス。ガフリーエルさまは、そんな俺たちを無言で見つめていた。



「あら、いけない」

俺たちの口が離れるのを待っていたみたいで、ガブリエル姉さんは手を叩いた。なんかワザとらしいな。

「用事を忘れていました。私は一度、上に戻りますね。また来ますから、貴方たちはそれまでいっしょに。それから、

天使ちゃん。契約はまだ継続中ですから忘れないようにね」♡

そう意味ありげに微笑んで大天使様はポポッと煙になって消えた。瞬間移動？ テレポート？ ルーラの呪文か？

「なあ、コノいかにもな煙幕は演出なのか？」

「大天使様の定番ですよ。前にアメリカの魔女奥サマドラマが上で流行ったですよ。それからですよ」

「今は何が流行ってるの？」

「日本のロボットアニメですかね。わたしは見てませんですけど」
喋っけ。



わんこ。キャラリーはまった。

「やんこ、天使ちゃん」

「なんですか」

「おフロ、はいっか？」

「死ねばいいですよ。下支離」

ベッドの上、俺のト下で横たわりながら、天使ちゃんはバツサリ
斬り落とした。よく冷えた視線で睨む。

むむ、天使ちゃんが素に戻っている。こっちは実力行使だ。

「わわッ、ナニするのですかッ」

そのまま俺は天使ちゃんの服を脱がせにかけた。ジッパも
ホックも無くよく判らん素材だったが、強く引っ張るとスルリと
脱げた。ん、まさか脱がされ仕様か？ 期待してた？

「バカッ！ 強制力が効いてるだけです」

そっか。クミジューブ、強制力。

ナマイキ天使はホメると伸びる

2012年11月13日 初版

著者:Miyafool

Feather Novels

<http://featherblog.feathernovels.fool.jp>

Eメール info@feathernovels.fool.jp

イラスト協力

3Dカスタム少女 TechArts3D

MOD, ポーズデータ等作成者の皆様

特別出演

手だけカス子 3Dポーズ集様

<http://3dpose.blog93.fc2.com/>

この物語はフィクションです。

**実在の職業、団体、国家等には
まったく関係ございません。**

**なお、ストーリー上、違法行為に
あたる記述の部分もありますが、
当サークルはこれらの行為を
助長する意思は全くありません。**

この物語に登場する架空の

**キャラクターは全て20歳以上
の設定です。**

誤解無きようお願いいたします。

**体験版の内容は
ココまでです。**

**続きは製品版で
お楽しみ下さい！。**

**御笑覧いただき、
ありがとうございます**

ございました。